

日本語を勉強しながら感じたこと

金 珉 娥(銅賞)

私は中学校3年生の時に始めて日本語と出会いました。その当時、私は日本の音楽にははまっていて、ただ歌の歌詞が知りたくて日本語の勉強を始めたんですが、勉強すればするほどだんだん好きになって、今は大学の日本語科に進学してもっと専門的な日本語を習いたいと思っているくらい日本語が大好きです。

このような私に周りの人は「日本語は最近経済がよくないから、日本語を勉強したって将来がないよ」とよくいいます。もちろん、その人は私のことが心配でしてくれたのですが、私はそういわれるたびに少し悲しくなります。それは日本語に対する私の気持ちが誤解されている気がしたからです。私が日本語を勉強している理由は、日本が先進国だからではなく、日本の文化が好きで、日本語が好きだからです。もちろん、日本が先進国だから日本語学習者が得る利益は多いかも知れませんが、それが日本語学習の目的にはならないはずだと思います。そしてそんな考え方では日本語の勉強をあまり続けていけないと思います。

外国語を勉強するという事は、単純にその国の言葉を習得することではなく、その国の独特な文化を理解するというひとつの課程です。もしある外国語の実用性とか将来性だけを勉強することにしたなら、将来いい会社に就職することはできるかもしれませんが、それよりもっと大切なものをなくしてしまうのではないのかと思います。

最近中国の経済の急成長のおかげで韓国では中国語がブームです。しかし、十年前までは日本の経済がよかった理由で日本語がブームだったのです。この現象は何を意味するのでしょうか。私たちが言っている「将来性」というものはいったいなんなのでしょう。私は「将来性」というものは景気によっていつでも変わる可能性がある不確実なものだと思います。そんな不確実なものによって外国語の勉強を始めたりやめたりするのは時間、お金のむだはもちろん、外国語についての興味もなくなってしまうかも知れません。

私は中学校3年生のときから今までの4年間ずっと日本語を勉強してきました。そしてこれからも日本語の勉強を続けるつもりです。でも私は「もう飽きた」という気持ちなく、むしろこれからのことが楽しみです。もし私が日本語の将来性など考えながら勉強していたとしたら、こんなに長い間日本語の勉強を続けることはできなかつたし、これだけ日本語が好きになれなかつたと思います。

「何か」を対するとき、それが何であれ、目的でなければなりません。もしそれが目的ではなく手段としあつかわれるとしたら、その「何か」はもう自分だけの価値をなくしてしまいます。日本語の勉強自体が目的だと思わずに何かのための手段として日本語をあつかうから、「日本は最近経済が悪いから、日本語を勉強したって将来性がない」などの、まるで日本語を勉強するというのには全く価値のないようなことをいうにではないのでしょうか。今まで日本語を手段として勉強していた人もこの話を聞いて日本語をもっと楽しんでくれればいいなと思います。

私の最近の関心事、「密教」

金 善 徳(奨励賞)

私は日本と日本語にすごく関心をもっています。そのなかで日本のアニメーションが大好きです。今日はジャパンアニメによくみられる「密教」について話します。

まず、「密教」というのが何かよく知らない方のために簡単に説明します。「密」というのは、字のとおり秘密という意味をもって、「教」というのは宗教の教からきた字です。つまり、密やかな宗教という意味です。

これから、私が話したい密教というのはとくに仏教の秘密教をいうものです。ここで宗教の話をして、もしかして私を変な宗教人だと思う方がいるかもしれませんが、私は別に宗教をもっていません。宗教をもっていない私が密教というものに心を傾いたきっかけは以外に単純です。いろいろな種類のジャパンアニメを見ながら自然に興味をもつようになっただけです。アニメなかにとくに日本の坊さんがへんな手の動作と呪文をいいながら妖怪を退治するのを見て、本当におもしろくて不思議だと思いました。これは架空の話であっても、韓国のアニメでは坊さんが妖怪を退治することはほとんどしないからです。

このように密教に関心をもっているうちに、偶然、密教について書いてある本を見つけました。その本を読んでから私はいくつかの術をわかるようになりました。みなさんがよく知っている『エックス』というアニメをみると「さらた」という人がいます。方言を使いながら赤い帽子をかぶって黄色いジャンパーをよく着るこの人は密教の坊さんです。この人も先話したような変な呪文を使います。

また、『鬼神童子ゼンキ』、韓国では『チョンゴンジョンサゼンキ』とよく知られたアニメにでる「じゅうかい」という坊さんとサングラスをかけた坊さんもそうです。「ヨギエソニョンホヤ」という漫画では密教のひとつの門派が主人公といっしょに妖怪をしりぞけます。でも、アニメや漫画では威力などが誇張されているはずです。実際はあれほどではないと思います。

これまで私が密教について話だけをしましたが、今度はみんなといっしょに実際やってみましょう。今、私が教えようとするのはよく使われる一番基本的なものです。

まず、私のように手の形をしてみてください。そして邪をはらう気持ちになってこういってください。「裂」「者」「臨」「在」「皆」「兵」「前」「陳」「闘」。今度は先の応用です。かなり難しいです。「裂」「者」「臨」「在」「皆」「兵」「前」「陳」「闘」。これで邪をはらうことになります。

今、私が密教について全てを教えたわけではありませんが、少しでも密教というのがわかるようになったらうれしいと思います。そして、今度日本のアニメを見るとき、このような場面ができれば、密教というものについて少しはおわかりになるでしょう。

21世紀パートナーとしての韓国と日本

金 恵 英(優秀賞)

よく韓日関係のたとえに「近くて遠い国」という言葉があります。それは地理的に一番近い隣の国にもかかわらず、今だ片付いてない過去の歴史という壁があるからです。しかし、21世紀にはいつから韓日両国の交流が頻繁に行われるようになり、政治、外交、軍事、経済の面はもちろん、共に21世紀を導くパートナーとして相互協力の必要性が強調されています。

私は中学1年のとき、日本の姉妹校の学生たちと、韓日の交流行事に参加することができました。最初は言葉が通じ合わなくて、身ぶり手ぶりで話しました。なかには片言の英語で話す人もいたし、日本の学生のなかでは簡単なあいさつを覚えてきた人もいました。不思議なことに、はじめての出会いなのに、まるで昔からの友だちのようにみんなが親しくなり、あちらこちらで笑い声が絶えませんでした。別れのときは、涙を流す人もいました。だった一日のことでしたが、その出会いをきっかけに私たちの繋がりは続いて、今でもメールのやりとりをして友好を深めています。

日本の友だちに会う前には、日本は、私の国に悪いことをした国としか考えられなかったのです。しかし、日本の友だちとの出会いや友情を通じて実際の日本人たちの生活を理解し、いきいきとした日本の文化に接することができました。今も多くの中学や高校が日本の学校と姉妹関係を結んで交流を行っています。また、最近では、通信技術の発達でインターネットや画像授業など様々な方法で交流することができるようになりました。韓日両国にとって文化交流はお互いの誤解を解ける大切なチャンスです。形式的な交流ではなく、お互いを理解できるような真剣な交流が続けられたらいいと思います。

そのために必要なこととして、正しい歴史教育が行われるべきだと思います。日本の学生たちと独立記念館に行ったときのことで、日本の学生のなかには、占領時代に韓国人に対して行われた様々な行為を示した写真や模型をみて、驚きのあまり泣いてしまう人もいました。その反面、日本のおかげで韓国人の暮らしがよくなったと知っている人もいました。そして、太平洋戦争の時、無理やり日本に連れて行かれた、あるおばあさんたちに会った日本人の学生たちは「おばあさんたちが微笑いながら日本語で話しかけてきたときは、悲しくてたまりませんでした。」といました。最近の若い人たちは、戦争中、あるいはそれ以前、起きたことを知る機会が少しずつ減ってきています。だから過去に起った悲しい出来事を二度と繰り返さないためにも、正しく伝えることが大事だと思います。

最後に相手の国に対する誤った認識を改めるべきだと思います。私の国の子どもたちはほんやりと日本に対して否定的な認識をもっています。高校生や20~40代では日本について肯定的な意見が多かったことをみると、小さい頃には断片的な知識のせいで偏見をもってしまうかもしれません。そして日本では在日韓国人に対して差別がまだ残っていると聞きます。お互いに違いやよさを認め合い、相手を理解し合う関係が築かれることを願います。

2002年ワールドカップの後、韓日友好の声が、いつもより高まっています。あるリサーチによると、回答者全体の7割以上がワールドカップ共同開催以後、お互いのイメージがよくなったといいます。韓国と日本の人たちがいっしょに相手の国のチームを応援する姿をみて、こんなに短い時間に仲よくなれるなんて、スポーツの力というにはすばらしいなと思いました。これからの21世紀をいきて

いく私たちは同じ地球上に共存する仲間として協力し合い、手を取りあって歩いて行きたいと思えます。

「未来」という名のダイヤモンド

朴原寛(奨励賞)

人々は時々、未来を表現する度にこんな言葉を使います。「今からやってくる未来だ。」しかし、私はそう思いません。未来がただやってくるものなののでしょうか？そうではありません。それは、今、ここでその未来を自分の手で作ることなのです。それも自分が夢みたあの未来に。

今、私は参加者の方々と、ご家族の方、審査員の方の前でこのようにスピーチをしています。これはもうすぐくる授賞式という未来の時間を、私が望むほどのいい未来につくるための一種の努力なのです。私はそのために、過去でも、未来でもなく、今私の全力を尽くさなくてははいけません。私は最善を尽くします。また、この小さい努力は私にそれなりの対価を与えてくれるはずですが。このように誰かが自分の未来のために現在の状況でできる限り力を尽くせば、それはその人の望むとおりのかたちでいつかはみつけれられるはずですが。

例えば、みなさんが何かのことを進めていると試してみましよう。ならば、それが成功するためには、自分が夢みた未来になるためには一体何が必要なののでしょうか。過去の努力を信じて現実で怠ってもいけません。また、今のことを持ち越してもいけません。大事なものを、そして絶対的に必要なのは、今何をやるということです。その刹那の瞬間に積極的に未来を切り開く、その姿勢こそが、バラ色の未来を約束します。

今という時間はすぐ過去になって過ぎていきます。過ぎていくものだからただ見捨てていいというわけではありません。過ぎた時間は私たちがもう一度、自分の姿を映してみられる鏡のようなものです。美しく輝く鏡をつくるためには、今という瞬間を大切に、全力を尽くすべきです。そしてその鏡に自分の未来を映してみるのです。今何をしているかの次第で鏡のなかの自分の姿は変わります。それに映る笑顔も涙もみんな自分の手にかかっているものです。

みなさん、未来に何かをか叶いたいと思っていますか。ではその先に自分の現在に耳を澄ましてください。もし、私たちが努力もなく明るい未来を欲しがって、そのまま運命を受けるといえば、それは砂の上に城を建てることと同じです。それに引き換え、現在を楽しんで、自分を居場所で役目を果たす人は堅固にめり込んだ岩の上に城を建てることができます。

みなさんはたまに機会をとりながして、後悔する人を見たことがあるはずですが。彼ら後悔する理由はただひとつ。自分の現実をみずして、あまい未来だけを欲しがっていたからです。例えば、競馬をしてお金をなくした人は、そのお金で商売をすとか、お店を開いて稼ぐという、すわなち彼が欲しがっていたたくさんのお金を得られるとは思いません。ただ、楽に稼ぐとするから失敗することに決まっているのです。未来というのはそんなものです。絶対に未来に対して怠けた姿勢を取らないでください。少しでも現実でまじめに生きていけば、未来という名の女神はもっと明るく微笑むはずですが。

しばらく自分の人生を顧ってください。そして私たちがいくつの現在と未来を繰り返し、それなりの過去をつくったのか試してみてください。満足する方も、満足しない方もいらっしゃるはず。満足しても、満足しなくても、これから自分の現在をまっすぐみてください。そして、今という名の鉛筆をとって、ひとつずつ未来という絵を描くのです。

今まで、似たりよつたりの話をくり返しましたが、私が話そうとしているのはこれだけです。私は、現在と未来、そして過去が、ダイヤモンドを加工することと同じだと思います。未来は可能性を抱いたばかりのときには、洞窟の壁から落ちてきた原石と同じです。その現在という原石を、努力という汗と道具で磨けば、それはこの世界中で一番輝く未来という宝石になります。そして残された過去というくずは、自分がどれだけの努力を繰り返しながら、ここまできたのかを考えてくれます。目の前の未来がまぶしいとはいえ、それを捨てないでください。ですから今、みなさんと私自身に聞きたいことがあります。今、未来のために何をしているのかと。

日本の文化って...何?!

徐 東 煥(金賞)

先日、私は千と千尋の神隠しというアニメーション映画を見ました。日頃から日本の大衆文化に興味を持っており、たいへんうれしかったです。韓国でも日本のアニメーション映画が見られるようになったと。

今、日本の大衆文化、とくに、エンタテインメント産業を開放するべきかというテーマが話題になっていますが、これからこの問題に対する私の意見をみなさんに話たいと思います。この問題については賛否両論ですが、私は開放すべきだと思います。

反対している理由はいくつかあるのですが、まず日本のエンタテインメント産業の韓国進出により、国内のエンタテインメント市場の縮小、それによる国内エンタテインメント産業競争力弱体化、大体こういう論理ですが、果たして本当にそうでしょうか。今、韓国ではかつてない韓国映画ブームになっています。それはハリウッド映画になれている観客をどんな映画をつくったら見に来させることができるだろうかと常に工夫し、努力した結果ではないでしょうか。今韓国映画ブームの先頭に立っている多くの監督たちは小さい頃からハリウッドの俳優や監督にあこがれて映画を始めた人が多いと思います。彼らにハリウッドの名作がなかったといたら、今でも、韓国の観客は韓国映画には背をむいていたかもしれません。それから、韓国の若者たちがとくに興味をもっているのは日本のアニメーション映画とゲームだと思っていますが、今、韓国にはアニメーション高校という学校があって、そこで多くの高校生たちが未来の宮崎ハヤオを夢みながら頑張って勉強しています。彼らは小さい頃この国のアニメなのかも知らないまま、テレビから移っている『鉄腕アトム』や『キャンディキャンディ』をみながらアニメーション映画の監督になりたいと思っていたに違いないです。

国内のエンタテインメント産業の競争力弱体化を心配して日本の大衆文化の開放を反対するのは矛盾です。むしろ、どんどん、日本のハイレベルのものを受け入れて、それを見習ってからこそ、競争力と

いうのはできるものです。今の韓国映画がブームになっているように。

あと、日本の一部、大人向けの雑誌や映画を見て、日本のエンタテインメント産業はレベルが低いとおっしゃっている方がいらっしゃいますが、それは理由にもなっていないと思います。本当にそれが理由で日本の大衆文化を開放するのを反対しているのであれば、アメリカやヨーロッパの低質文化に関してはどういうふうに思っているか、逆にお聞きしたいです。私にはアメリカやヨーロッパの一部低質文化が日本のそれに比べて、まだとはとても思えないです。私たちはジーンズをはき、ハンバーガーを食べ、コーラを飲みながら、日本のアニメーション映画を見てから、帰りには中華料理屋やイタリアンレストランで食事をするような時代に住んでいます。服装やヘアスタイルだけでは国籍がどこなのかわからないのです。

もう文化というものは70年代、80年代に経済復興のために叫んでいた「国産品を愛用しよう」というナショナルリズム的なものではありません。便利で安くていいものを選べるデパートのなかにどうぞと待っているようなものです。いい物、わるい物、高い物、安い物、と判断して自分にあうものを選べる権利が、私たち消費者にはあります。

アメリカのハンバーガーや日本のうどんが韓国に入ってきたから、韓国人はキムチを食べなくなるのか、お盆やお正月にお墓回りをしなくなるのか。ただ、キムチチゲを食べようか、デンジャンチゲを食べようかという悩みが、ハンバーガーを食べようか、うどんを食べようか、キムチチゲを食べようか、デンジャンチゲを食べようかというふうに変っただけではないでしょうか。マイケルジャクソンがアルバムを出したから、みんなそれを買っているから、韓国のアーティストが発表したアルバムを買わなくなるのか。それは違うと思います。韓国の経済力のことを考えるとそんなこといえないでしょう。外国のものが入ってきた分、市場は大きくなるのです。

あとひとつだけ残っていると思いますが、韓国と日本のことだから、もちろん歴史問題を考えなければなりません。日本の大衆文化を開放するのを反対する理由が過去36年間植民地支配されたから、だから日本とは交流できないというのであれば、さらに日本文化の開放は必要です。

韓国の若者には日本のことに興味をもっていて、詳しい人も少なくありません。しかし、日本の若者は韓国のことを知らない人の方が圧倒的に多く、誤解までしている人も多いです。それはお互いにお互いのことをあまり知らないからだだと思います。韓国では植民地時代のことがわりと詳しく教えられ、日本に対してどうしても反感ができてしまいます。しかし、日本の若者たちはどうして韓国人が日本人に対してそれだけ反感をもっているのかわからない人の方が多いのです。誰だって、わけもなくけなされたりしたら、いい気分にはなりません。このような状況では両国の人々の感情の溝は深くなる一方です。これは根本的な解決ではありません。お互い知ることのできる、交流のできる場を作らなければなりません。文化というのはこの国の思想や習慣などを反映しているからお互いの文化を接することによってよりいい関係に発展できるのではないのでしょうか。

話が少しずれてしまいましたが、韓国と日本は一番近い国であり、様々な面で協力しています。大衆文化も一刻も早く開放してお互い理解し合える関係になるのが両国にとっても一番理想的だと思います。歴史問題もこれからは前向きな姿勢で解決に臨む時だと思います。過去を忘れてはいけませんが、過去は過去。未来のためにはもう少しお互い心を開いた方がいいと思います。

最後に、何が真の愛国なのかをもう一度みなさんに考えていただきたいと思います。私は昔、鎖国

政策で時代の流れに取り残されてしまったことを覚えています。このような過ちは二度と繰り返してはいけないと思います。

自然をまもり、パラダイスへ行こう

徐 ようる(優秀賞)

みなさんは「パラダイス」ということばを聞いたら、まずどんな風景が頭のなかに浮かびますか。いろんな花が咲いているなだらかな丘、青い色をした静かな海辺、あるいは、今日の科学発達によって空高く聳えているビルのジャングル…、みなさんのパラダイスはどんなイメージをしていますか。それは人それぞれ違うと思いますが、上の例からひとつ選ぶとしたらみなさんは何を選びますか。多分、大部分の人々がビルの風景よりは、自然の風景を選ぶことでしょう。では、それはどうしてでしょうか。私はこの質問の答えは自然が私たち人間にあたえてくれる「心のやすらぎ」と「心の余裕」にあると思います。私の場合、趣味のひとつとして新聞のスクラップをしています。特に素晴らしい自然の風景はめがずに集めています。そんな自然の写真を見るだけでも、心がやすらかになるような気がするからです。また、これはたくさんの人々がバカンスを海とか渓谷に行くことからよくわかりますね。

18世紀産業革命以来、私たち人間はすごい勢いで科学と技術の発展を成し遂げてきました。そして、今は前よりもっとはやいスピードで明日を迎えています。しかし、あまりにも忙しくやってきたせいか、私たちは本当に大切なものを忘れていました。それは自然です。私たち人間は昔から自然と共に生きてき、生きて行くために要するものを自然から使ってきました。今の人間社会を形成する基盤となった産業革命も自然のなかにある資源がなかったら夢にも見れなかったことでしょう。とにかく、自然の活用による科学発展のおかげで私たちはらくに生活しています。でも、だんだん機械化して行き、自動化して行く時代の今日の人間は科学に依存しすぎたあまり、弱くなったような気がします。何をしても「満足する」ということを知らず、少しでも不便なことがあったら後先も見ないで勝手に変わせたり、無理してでも新しいものを作ったりします。だからといって、その新しいものを作ったり、ものごとを発展させて行くことに問題があるというものではありません。むしろ生活の質を高めるためのそんな行動はあたりまえなことだ素晴らしいことだと思います。ただそうやっていく過程に自然が破壊されることが問題だということです。無差別な伐木、工場と家庭からの廃水、車の排気ガス、真夏のクーラーからのプレオンガスなど。そしてその被害はスモッグ、水銀-カドミウム中毒、地球温暖化、オゾン層の破壊などの形になって私たち人間の命を脅かしているともいえます。

でも良かったことに自然の大切さに気がつき、自然保護に気をつける人たちがふえていることです。この前新聞でイギリスのティムズ川の最新写真をみたことがあります。最初その写真を見て私は「ここが本当に都市のなかでみれる風景か！」とびっくりしました。周りにならんでいる緑の木々と川がともになって、スモッグのせいで汚染されていた川であったとは信じられないほど美しかったです。

またハリウッドの有名な女優、俳優たちはだんだん自分らの車を電気で行く車に変えているそうです。そして最近バスもだんだん天然ガスを燃料にするものに変えています。これ以外にも水素、磁石など公害のない燃料の開発を始めいろいろな分野で研究が行われています。このようにこれからは科学を人間文明だけではなく、自然を保護するためにも使わなければなりません。またこれは私たち人間がこれからもずっと生きつづけるためにも重要なことです。

では、科学の面以外に私たちが簡単にできる自然保護としてはどんなことがあるのでしょうか。いろいろなものがあると思いますが、これからはそのことについて考えてみたいと思います。まずごみをリサイクルすることです。紙、缶、びんなどをリサイクルすることによってごみの量も減らすことができるし資源節約もできます。そしてリサイクルができない、残った食べ物は庭に埋めることがいいそうです。それは土が一番いい自然分解の方法になるためだそうです。庭のない家もありますがそんな場合はしょうがありません。残さないで全部食べてください。あとは自然保護を生活化することです。

いつか前テレビを見ていたら次のようなものがありました。日本のある村でホタルを保護するためにいろんなことをしているという内容で、その村の人たちは直接川の掃除をしたり、洗剤も自ら作った天然洗剤を使っていました。ホタルはきれいな環境でしかすまないの自然保護をさきに行っているのです。また、村の子どもたちにもその活動に参加させて、自然の大切さをわからせるようにしていました。もちろん、子どもたちも楽しみながらそのことをしていました。治療することより予防することがもっと重要だという言葉があるように自然を保護することも幼い頃から身につけておくことが大切なのではないでしょうか。

さっき、私がパラダイスの話をしましたが、花があるなだらかな丘、あおくてしずかな海…、ただ想像のなかだけの話ではありません。私たちが自然を大切に、保護することによってパラダイスを実現することができるのです。みなさんはどう思いますか。みなさんも心を合わせ、力を合わせて、パラダイスへ行こうではありませんか。

切っても切れない関係、ITと文化

宋 炅 鎮(優秀賞)

みなさん、去る6月を覚えていますか。すべての国民がひとつになってみんなが赤い色のTシャツにきがえ、至るところで、『大韓民国』を叫んでいた日々を。驚くほどの発展をとげた韓国の選手に世界中が韓国に焦点を合わせました。昔からベスト16が目標だった韓国はベスト16はおろか、1勝も得ることができませんでした。しかし、今回の2002年ワールドカップではヒディング監督の「われらは世界を驚かせることだ」ということばのようにベスト16を越えてベスト8、ベスト4への神話をえました。

今は外国に出ても『Korean』だといえば、わからない人がないほど、韓国は世界に名前をあげました。韓国の製品は一昔よりもっと信用を得て、よく売れています。世界中の人たちは今度のワールド

カップの優勝国家のブラジルよりも大韓民国の赤い波をもっと覚えています。

サッカーで世界の歴史を塗り替えた韓国、21世紀を迎えて韓国がこのように希望の光がみられたもっとも核心的な力は何だったのでしょうか。もちろん、選手たち、ヒディング監督、コーチ、その他のたくさんの周りの人々の力が大きかったのです。しかし、私たちにもっとも大きかった力は世界を驚かせた『赤い悪魔』の応援でした。

全国の至るところに集まったたくさんの人たち。そこには性別と世代を越えて誰もが恥ずかしがらず、抱きしめ合い、よろこびました。誰かが指示することなく、みんなが自然に集まりました。

数多い国民たちを街にかり出させた原動力は何だったのでしょうか？人々は毎日TVを見たり新聞を読んだりします。ある人たちはラジオを聞いたりします。近頃は科学が発達してインターネットを通じて今日どんなことがあったのかをわかるようになりました。もし、このような情報網がなかったなら人々は街で大規模な応援をすることができなかつたでしょう。このように、インターネットは私たちの日常生活になくてはならないものになっています。新しい情報を得たり使ったり、空間の制約を受けずに人と人が会ったりすることができます。世界はいつそう近くになりました。

このように私たちの生活を豊かにする通信の役を担当しているものをITだと思えます。ITのおかげで世界は韓国がわかるようになりました。世界の関心は韓国に集中するようになりました。そして、すてきなワールドカップを観覧することができました。

韓国が日本の横浜に行けなかった理由をご存じでしょうか。それはドイツとの競技で負けたからです。私は今もあの日を覚えています。あの日には夜遅くまで友だちといっしょに競技をみました。手に汗をにぎって応援をしましたが、競技はいい展開にならず、結局1:0で負けてしまいました。私は悔しい感情を押えきれず、ついに多くの友だちの前で大きく泣いてしまいました。応援のためにもってきた国旗に顔を埋めて、本気で泣きました。思えば思うほどとても恥ずかしかったです。でも、その後のニュースをみたら、泣いた人は私だけではなかったことがわかりました。全国の各地で私のように泣いた人はたくさんいました。あの時の競技をみて、私の感情と同じくとても悔しかったと思います。このように多くの人々のあいだに共感が生まれることを文化だと思えます。しかし、ITと文化はそれぞれ独立的に存在していることではありません。ITのなかにも文化的要素が含まれていて、今いった文化のなかにもITの要素が含まれています。ふたつのなかでどちらを失われると、残りのひとつもその機能を失うようになります。まるで、ろうそくとマッチのようにITと文化も切っても切れない関係におかれていることなのです。今度の2002年ワールドカップを通じて、より関係が深くなった日韓両国にとってITと文化との関係は絶対逃してはいけない課題です。ITの強国と呼ばれている韓国、ファッション、ゲーム、アニメ、音楽など、エンターテインメントの集合地の日本、この両国はこれからお互いにいい友だちになって、世界をもう一度驚かせることです。昔の韓国のTV広告のなかでは「愛は電波に乗って流れる」ということばがありました。携帯電話に乗って流れる恋人の声は当時には画期的な話題になりました。恋人にとって大切な愛さえもITの恩恵を受けとり、それをみて携帯電話の文化を作って行く人たちはいい一例です。

21世紀は「文化の戦争だ」という人々が多いです。それより私たちに与えられたITを文化といっしょに開拓しなければならないことを忘れてはいけません。とくに、これからの日本と韓国はITと文化の市場の中心に立っていることを忘れてはならないと私は思います。

私の人生を変えた日本語

宋 和 玲(最優秀賞)

みなさん、こんにちは。私は果川高校の3年生、花の受験生です。みなさんもお存知のように、韓国の高校3年生というのは、人生のなかでもっとも緊張した日々を送っているといっても過言ではありません。そんな受験勉強のまっなか、今日、私がこの席でみなさんにお話ししたいこと、それは「私の人生を変えた日本語」についてです。

私が、日本語に出会ったのは中学生1年のとき、当時は98年フランスワールドカップのアジア最終予選が行われていました。もともとサッカーファンだった私は、テレビ中継を通して中田英寿選手のプレーに魅了され、大ファンになりました。「いつか中田選手に会えたら、一言でもいいから日本語で話しかけたい。」そんな素朴な願望、それが日本語を勉強するきっかけになりました。

それから私は日本語の勉強をはじめました。やらなければならない学校の勉強と違って、自分の意志ではじめた日本語は、私に充実した楽しい時間と、やればできるという自信を与えてくれました。高校1年生になった頃、日本のアーティストの音楽を聴きながら、その歌詞の内容を理解している自分を発見したときの感動は今も忘れることができません。高校2年生になってからは、これまでの実力を試すため、日本語能力試験に挑戦してみることにしました。そして日本語能力試験の1級に合格しました。学校の教科とっしょに日本語の勉強をすることは大変でしたが、合格通知を手にしたときは、天にも舞い上がる思いでした。人知れず努力して得た結果は、私の人生に大きな感動と転機をもたらしました。

実をいうと、私の学校では第2外国語で日本語を教えていません。私は学校では英語とドイツ語を勉強しています。それでも、私は日本語に大きな魅力を感じています。日本語は思うこと、感じることを美しい言葉で表現することができるからです。また、日本語を勉強していくなかで、日本語と韓国語が非常に似ていることをわかってきて、底知れない面白みも感じています。このようにして、私があきらめずに日本語を勉強することができました。

私は、幼い頃から小学校の先生になりたいと思っていました。でも、日本語との出会いを通して、私の夢は大きく変わろうとしています。今の私は、インターネットの同好会で日本語の歌を韓国語に訳して、日本の音楽特有の美しい歌詞を多くの人に伝えようとしています。私の夢は、日本と韓国の友好の架け橋として活躍できる人になることです。「近くて遠い国」と言われてきた両国が2002年ワールドカップを通して、歩みよりをはじめました。これまでの暗い歴史の壁を打ち破り、両国がアジアを代表する国として、ひとつになっていくことを心から祈っています。時々、日本語に出会わなかったら、私は今なにをして、なにを目指しているだろうとったりします。日本語は私の人生を大きく変えました。そして、多くの教訓を与えてくれました。日本語に出会えて本当によかったです。

最後に、日本語を勉強するきっかけを作ってくれた中田選手に「ありがとう」の言葉をおくりたいと思います。

忘れられない日本の先生

楊 洞 華(奨励賞)

幼い頃、私は日本の東京で2才から5才までの4年間住んだことがあります。その時、私にピアノを教えてくださったワケフサコ先生のことをお話します。私がワケ先生からピアノを習ったのは4才から2年間でした。私がピアノを習うようになったのは、3才上の姉が家の近所にあったワケ先生のヤマハ・ミュージックセンターでピアノを習っていて、ある日、姉と一緒にセンターに行ったのがきっかけでした。

私は、本が大好きでセンターの入り口に置いてあるたくさんの本を読むのが楽しみでした。姉のレッスンが終わるまで本を読んでいるあいだ自然とピアノを習い始めました。今も記憶に残っているのは、ピアノのけんばんをはじめて弾いたときワケ先生はとても親切に教えてくださいました。「手のなかに玉子が一個入ってる気持ちで弾いてね。」とおっしゃったのを今でも覚えています。

ピアノを習い始めてから1年後に東京大学国際交流会館に引っ越しました。先生は家までわざわざ来て教えてくださいました。たまに韓国の人参茶を差し上げると「体が元気になりそうですね」と笑いながらおっしゃいました。また、韓国の食べ物をお食べになるときは本当にうれしく召し上がる人情深くきれいなおかたでした。

私は4才の頃、成長病で病院に入院したことがありました。救急車で運ばれて入院の続きをするとき、同じ階で歯の治療を待っていたらしたワケ先生と偶然に会いふたりともびっくりしました。そのときあまりにも痛くて私は死にそうで泣いていました。先生はあたたかくなぐさめてくださりながら「もうすぐ治りますよ。」と勇気づけてくださいました。入院中はしょっちゅう病院見舞いにこられてはおもしろい本を読んでもくださいました。その後、先生のおかげで元気になり再びピアノを弾いて秋にはヤマハホールで発表会にも出ました。先生はいつも暖かい心と共に親切でやさしい心をおもちでした。その年の冬、私は家族と一緒に帰国しました。

その後、小学校2年のとき母と一緒に再び東京を訪ね、ワケ先生にお会いすることができました。新宿駅からホテルまで夜道を歩きながら昔の私のことを思いだしながら、たくさんのお話を聞かせてくださいました。

今でもお手紙、電話、年賀状それからカードやイーメールなどでお便りします。たまに母が私の写真を送ると「こんなに大きくなったの。」とびっくりなさいます。会えなくなってもう10年ほどたちました。私が幼いころから心に残っているワケ先生のあたたかい教えを今でも忘れていません。私が成長する姿を遠くからみまもっていらっしやと思います。

今年65才になられる先生は電話やお手紙を通じて韓国に一度きて成長した私に会いたいとおっしゃっていますが、今はヤマハ・ミュージックセンターのことでとても忙しいあまり、まだ韓国に来ることができません。私もこれから大学生になり、この美しい韓国をぜひ案内してあげたいし、また、お目にかかりたい忘れられない先生です。

未来の数学教師

劉承希(奨励賞)

私の将来の夢は、中学校、または高校の教師になることです。いや単なる教師になることではありません。もっと理解しやすく、面白い授業のためにいつも工夫し、学生のことに耳を傾け、みんなで楽しい学校をつくるために働くことです。そうですね、金八先生みたいに。

ここ何年間、日本語好きになっているのに、なぜこのような夢ができていくかということ、母の影響だといえましょう。私の母は21年前から数学の教師で、毎日弟子から電話がかかってくるほどの人気者ですよ。男の弟子からだと、父はもはや嫉妬のマスクに変身するのです。学生との距離感がありません。小さい頃からこういう母の後ろ姿をみながら育ってきた私、先生の夢をもつようになったのも無理はないと思います。それで、私の担当したい科目もやはり数学です。

数学、難しくてあきらめてしまったとおっしゃる方もいらっしゃると思います。でも、実は数学ってそんなにかたい科目ではありません。例えば、横断歩道を渡る時にも、車の速度を判断し、わずかな瞬間をとっている間に頭のなかでは、なんと大学レベルの数学問題が計算されているのです。つまり、誰だって数学が上手になれる、だからあきらめてはいけないってわけです。数学に弱いみなさん、もっと自信をもってください。

しかし、現実はそのなかにあまいものではありません。いくら数学が興味を呼び出す科目だといっても、教育制度が支えてくれないとだめなのです。韓国の学校の問題については、みなさんご存じだと思います。教科書の内容が広すぎ、詳しくすぎることです。韓国の高校2年生は微分・積分を勉強しているのに、同じ年のアメリカやイギリスの学生は簡単な二次方程式や因数分解を習っていると聞きましたが、それは韓国の学校では中3で終わるものですね。それなら、ゆっくりと原理を理解するような授業ができればいいですが、数学の授業中はいつも進度に追われるようになってしまいますね。教師も、学生も。なぜかということ、やはり大学入試だけが中等教育の目標であるからです。なんだかんだいっても、それが事実なのです。

そこで楽しい数学時間をつくるということは、教師一人のことだと思われがち。多くの教師がどっと疲れてしまい、つまらない授業をするようになるのも当たり前です。それで学生たちはだんだん意欲を亡くし、教師もいらいらになってしまうという悪循環。そういうわけで、数学はつまらない科目扱いされてしまうのです。いや、それよりも大きな問題は、みんなそういう入試だけのための授業に慣れて、学校なんか、もともとそういうものだ、先生なんか役に立たないって思うようになってしまうことです。

私にこういう実態をほっておくことはできません。学校は学生にとって、日常の一番大きな部分を占めているもの。その学校での時間が苦しいということは、決していいことではありませんね。それで私は準備しているのです。もっと楽しめる授業を。そして意思のある先生たちと、学生と本気で動きだすと、これからの学校は大きく変わると思います。このためには、これからもずっと努力して行きます。みんな「学校に行きたい」と本気で思えるように、いつでもみんなの頼りになれるように。

日本のコギャルについて

李 椰 瀝(優秀賞)

今日は、みなさんに日本の「コギャル」について話したいと思います。日本には「コギャル」ということばがあります。これは10代の女の子を指すことばです。子ギャルの「コ」は「子ども」の子からきて、「ギャル」は英語の「Girl」の意味ですが、俗語で「ギャル」と呼ぶのです。つまり、「子どものような女の子、子ども(コ)+女の子(ギャル)が、社会的な隠語に変わって「コギャル」になったのです。

黄色、赤色に髪を染めて、パーマをかけて、ハワイの海浜でみられる、花模様のひらひらするワンピース、それにアフリカから帰ったばかりのような真っ黒に焼けた皮膚、目尻に空色のアイシャドー、銀色のルージュ、つめごとにはでな絵、着替える服がいつも入っている大きいカバン、高さ20cmもある靴…、これがコギャルの典型的な姿です。

実は、どれくらい前までも大多数の日本人はコギャルとしたらみっともない服装に鬼のような化粧をする変な女の子だと思っていました。はじめな生活とは遠く、援助交際もするほどの問題ばかりの子だと思ったのです。実際にコギャルのなかにはそんな亂れた活をする人が多かったので、時々、社会的な問題になってマスコミの記事にもなりました。とても一部だと思ったコギャルがいつからか急激に増えてしまいました。

以前は特定地域、特定の街にいたコギャルたちがいつの間にもいたる地域、どんなの街に行ってもよく見られることになったのです。このことでもっとも大騒ぎになったのは、10代の娘をもっている親たち、そして学校とマスコミでした。知らないうちに娘がコギャルになっていたのです。それほどコギャルはやめさせることもできないひとつの流れで、10代たちの日常生活に急速度に広がっています。これは単純な真似ではありません。

決められたカテゴリーのなかで決められた時間表のとおり勉強しなければいけないこと。模範生にならなければいけないこと。両親とか学校の先生の一方的な意見を聞かなければいけないという強迫観念とストレス、とくに10代の女の子たちはこういうストレスの解消ができる場所がないということ。10代の女の子たちのこんなストレス解消の方法がメイク、ヘアスタイル、ファッションで表現して噴出されているのです。学校の生活で抑制された自分の考えと感情の反発ということ。それで学校の生活と言う一定期間が過ぎると自然にコギャルの生活も卒業することになるのです。

韓国にはコギャルということばがありません。でも韓国の10代たちも日本のコギャルのように学校などで受けるストレスを自分の個性という名で表出して解消してることではないでしょうか。そういう理由で、まだ学生だから勉強以外のことはだめだということより、良い方法で10代たちも楽しめる文化と場所を大人につくってもらいたいのです。

韓国大衆文化の未来

李 瞳 鎬(奨励賞)

日本語を勉強しながら、初めて日本語を接するようになったきっかけを思い出します。それは音楽でいたが、私はただ日本の音楽だけではなく、日本の文化、そして「日本」というひとつの国に大きな関心をもたれました。様々なジャンルの共存はもちろん、体系的に動くメインシステムの流れ、日本文化に門外漢だった私にも、それにはやさしく近づきました。ひとつの国の大衆文化、とくに大衆音楽というものがどれくらい大きい力と競争力をもっているかを感じられ、この関心は自然に韓国の文化に移されました。

大衆音楽は、ことば通りに大衆媒体を通じて大衆に伝達されて、大衆が楽しむ全般的な音楽をいいます。つまり、大衆は文化の主体といえ、この大衆にとって大衆音楽の影響力はとても大きいといえるものです。しかし、今、韓国の大衆媒体は一攫千金の「スターづくり」だけを考えています。眼前に見える短期的の利益にだけ求め、深さや楽しみをくれるミュージシャンを育てるかわりに、10代を主として、ひまつぶしにすぎない音楽をつくっているのです。また、華麗なメインストリムのかげで韓国大衆音楽の深さ加え、歴史を書いているインディシーンのつらさもやはりまじめではない現実の文化システムをみせています。

高等学校に入って約2年間、バンド生活を経験した私はそのインディバンド、インディシーンの現実がどれぐらいつらいのか実感しました。彼らは本当に音楽を愛し、専門ミュージシャンとしての道を歩きたがっています。でも、彼らの音楽と姿を大衆にみせられるクラブと公演機会の少なさ、それによる経済力のつらさがとても大きいです、インディフェスティバルのような比較的規模の大きい公演が1年に1、2回はあるとはいえ、この広報と推進力はほとんど後進国の水準といえるでしょう。

そこには、10代を主としての音楽市場のなかで、彼らの音盤制作とか広報などでとても不利な立場にいます。アメリカとかイギリスのような国を例えれば、メインのたくさんの媒体は、あるミュージシャン(メジャーとインディを不問して)の才能と可能性を確認したうえには、それに伴うおしめない投資をします。もちろん、以前の「ミュージシャンの発掘」に全力をつくすのは、あたりまえのことでしょう。こんな環境のなかでミュージシャンたちも誰にも劣らない自負心を持ち、彼らなりの音楽をやっているのです。

今、私たちは両極体制の終りをむかえ、第3世界を生きています。イデオロギだけではなく世界の文化も同じです。とくに国境のない言語とよばれる音楽はいうまでもありません。アメリカという巨大なふたつのストリームだった世界音楽市場は、今第3国の登場でだんだんその多様さを広げています。

韓国大衆音楽の忘れられた方向性となにより重要である「多様さ」の共存のためには、全体的な改革が必要です。今の断片的で短期的な文化システムじゃなく、より長期的で主体的に変わらなければなりません。また、大衆音楽の短所と指摘される画一性を克服するために、ダンスジャンルだけでなくロック、ヒップホップ、ジャズなど、よりたくさんのジャンルを受け入れる力をつけなければなりません。そして、批判文化の展開、文化への関心、未来の文化発展は期待しかねます。

最後にミュージシャンたちも音楽に対して明確で真実な態度、そして自負心をもって他の文化への包容力をもつべきです。結論的に、今の奇形的な韓国大衆音楽の問題点を解決するために、実力のあ

るインディミュージションを発掘し、これに伴う広報と支援をおしまないべきです。また、批評家たちの長期的で、まじめな眼が今の世界の文化の流れに合流できる唯一の道になるでしょう。

私のボランティア活動

李 秀 智 (奨励賞)

韓国の学生たちは、学校の課外活動にいい点数をとるために義務的にボランティア活動をします。そして、このボランティアの点数は大学の入学試験に影響します。だから、ほとんどの学生は仕方なくボランティアなどをしていると思います。もちろん、点数のためではなく、心からしたいと思ってボランティア活動をする学生もいますが、ほとんどの学生は点数をとるための活動です。私もそのような学生の一人でした。一人だったというのは、今はそうではない、そして、これからもそうではないということです。

中学のときは、道路を掃除したり、役所や郵便局の仕事の手伝いをするボランティア活動をよくしました。もちろん、それは点数のためだけで、心からではありませんでした。高校生になって、私は新しいボランティア活動をすることになりました。それは障害児や痴呆の老人の世話をすることでした。

今年は『コトネ』というところでボランティア活動をしました。そこは、身よりも、たよる人もない老人、障害者が暮らしているところでした。正直にいうと、行く前は障害者を恐いと思っていました。でも、私がいったとき、あたたかく迎えてくれたその姿やまなざしをみて、今までよくない偏見をもっていたのがはずかしくてたまらなくなりました。

私は食事からお風呂に入るまでの手伝いをしました。その間、私はことばではなく、目で話しながらひとつの大事なことを知りました。彼らも私たちと同じ人間であることです。いいえ、むしろ私たちよりもっとやさしくて、思いやりのある人たちでした。そこで私はわかりました。彼らに本当に必要なものは、あたたかい、一言、関心と愛情でした。

私が帰ろうとしたとき、また来てほしいといいながら泣く人もいました。私にまた会いたいと言って泣く人は今までにいませんでした。そんな人に会って、話をしながら、私がお人たちの力になれることをうれしく思いました。それは、心の底から自然に湧きあがってくるよろこびでした。彼らに必要なものは高価な物ではなくて、あたたかい心だったのです。

また、大きく感動したのですが、そこでは一人一人が障害をもちながらも、自立した生活をしようとしていたことです。そんな姿をみて感動し、私も周りの人にあまえないで、自分のことは自分でするように努力しようと思いました。帰ってからは弟と弟の友たちにもすすめました。彼らも『コトネ』でなにかを学んできたようでした。

この活動がきっかけになり、ボランティア活動に対していいイメージをもつようになり、これからもどんどんボランティア活動に参加しようと思えました。そう思って探してみると思ったよりも、いろいろなボランティア活動があることに気づきました。そのなかで私は病院のボランティア活動が

一番したいと思いました。

この世界は自分ひとりで生きていける世界ではありません。ボランティア活動は、私に誰かの力になるということ、みんなといっしょに生きていくという意味を教えてくださいました。そして『コントネ』でボランティア活動をしたときのことを忘れなく、これからもボランティア活動を続けていこうと決心しました。

円満なコミュニケーションのため

李 新 芽(奨励賞)

私はこれから通信体について話してみたいと思っています。通信体というのは、最近インターネットのメールで使われる書体のことです。以前にはただ文章の終わりを変えたり、エモティコンを使うぐらいでしたが、この頃は文字を数字や記号に変えたり、発音をゆがめて書いたりするなど一度みるだけではよく分からなくなりました。

私がこれを感じたのは友だちからのメールや文字をみてからです。多くの友だちが通信体を使っていました。もっとびっくりしたのは、この前国家機関のホームページをみたときも、申し込みのなかで通信体が使われたものをみたことです。

通信体は、自分の個性を表すことができます。そしてインターネットのなかだけ使うことばなので特別さを感じられます。相手と親近感を感じることもできます。

けれどもよくない点もあります。まず、文法に合っていないということです。発音をゆがめて書いたり文章の終わりを変えたりするからです。このまま通信体が広がって多くの人が正しくないことばを日常生活で使うなら文法は亂れるようになるはずですが、インターネットだけで使うとしても問題はあります。同じことばを自分だけのやり方で変えられうるので、相手がわからなくなります。ですから受けとめる人が通信体に慣れていないならわかりにくいはずですが、慣れている人とそうではない人とコミュニケーションがうまくいかないのです。

また通信体には相手をあまくみる考えがあります。通信体の尊敬語は普通のことばに近いです。これはインターネットでは年齢、性別などに関係なく、みんな平等な一人のネットィズンだという考えがあるからです。確かに親近感を感じられるけれども、相手によっては無視される気になるかもしれません。たとえば初対面のときや多くの人にいうときなどです。そんなときには気をつけた方がいいと思います。

要するに知り合いとの対話では通信体を使っても構いませんが、相手を尊敬するときには、標準語を使うべきだということです。通信体を使っても正しい文法をちゃんと覚えなければならないでしょう。

『もののけ姫』のなかの神と人間と自然

李 栄 翼(奨励賞)

1997年の夏、日本のアニメ界の歴史は『もののけ姫』という作品の登場で書きなおされました。韓国にも日本のアニメといたら『もののけ姫』を思いうかべる人が多いくらいとても人気があったこの作品は全体的にやわらかく流れる音楽や映像の様々な効果はアニメについてよく知らない私も感心するほどよくできていました。そしてそれより、この映画が伝えるメッセージは優れたものです。

この映画の主体は自然と人間です。昔から人は自然を恐れ、敬畏心をもっていっしょに生きていこうとしました。この作品のなかに自然に対して、このような情緒が自然は神として表現されていると思います。日本は『八百万の神(やおよろずのかみ)』ということばがあるぐらい、神が多い国で、神は私たちは思う遠いところにいる存在ではなく、近くにある自然で存在します。

人がない森のなかでも神が見守っていると思えば、勝手にごみを捨てることはできないことですから。神が人間たちのまわりにはこの作品のなかにもよく現れています。神が動物の姿をして出ていろいろな仕事をするのもそんな情緒の影響だと思います。自然を守ろうとする『いのしし』の姿の神と『山犬』の姿の神。そして、生と死を治める『鹿』の姿の神。

映画では彼らは昔から人間を見守ってきてまして、人間は彼らを恐れていました。しかし、時間が過ぎて自然は怖いもの、山や森は神が住んでいる聖地だという意識が消えてしまって人間は自然を破壊します。そしてその結果、自然はこの映画のなかに崇り神の姿で人間の前に出ます。

崇り神はいいます。「けがらわしい人間どもよ、わが苦しみと憎しみをしるのがいい。」このことばに対して、人間は今までに自然に何をしたかをよくいっています。自然に対して恐れを忘れた私たちの前に崇り神というものでその姿を表しました。前に進むために自然から命を奪いながら発展していきながら全部うまく行っていると考えてきました。だからこのようなことになるなんて、誰でも思わなかったから人間は驚きました。それは怒った自然からの警告でした。

今、私たちの生を反省しなければならなくなりました。生きていながら、なにを殺してなにを壊したのかを反省しなければならなくなりましたのです。この作品は、私たちが今まで生きてきた方法ではもう自然からの救援はないといえます。「私たちが自然からもらったものほど返す用意はできたのか。」と聞きます。そしてこの作品はその答えを神と人間との関係で探しているのではないかと思います。

コミュニケーションの機能と重要性

李 允 中(奨励賞)

みなさんはチンパンジに育てられた『ベルロ』という男の子を知っていますか。彼は発見されてからもう8年経ちますが、いまだにチンパンジと同じ行動をとっているようです。人間である彼はなぜこのようになったのでしょうか。私はこれをチンパンジとの接触、つまり、コミュニケーションに

よるものだと思います。

透明なセロハン紙を「ベル口」、赤いセロハン紙を「チンパンジ」と仮定してみましょう。二枚のセロハン紙を重ねれば、透明なセロハン紙は赤くなります。このようにベル口はチンパンジとのコミュニケーションで影響を受けてから人間であるにもかかわらず、チンパンジと同じ行動をとるわけです。

では、なぜチンパンジと接触する他の人々は彼のようになれないのでしょうか。その理由はふたつに考えられます。まず、普通の人々は基本的に人格を形成しているからです。先のベル口を透明なセロハン紙に比較しましたが、それは彼がなにもわからない赤ん坊の状態だったからなので、普通の人間は有色のセロハン紙に比較するべきです。そして有色のセロハン紙を使う場合、全然違う色になります。これはベル口とは違って人格をもっている人間は相手のことを自分なりに考えて必要なものだけを受け入れていることです。

もうひとつの理由は、第三者の介入です。私たちが住む社会では一人だけとコミュニケーションすることではありません。つまり、ベル口はチンパンジのやるのが正しいか、間違いなのかは関係なく、そのまま受け入れることしかできませんが、人間社会では、間違っただけをみたら、それをなおして、いい方向へ運ぶことができます。

このような理由で人は他人とコミュニケーションするべきです。もちろん、コミュニケーションすることで相手が全部いい人とは限らないですが、これもまたより多くの人々とコミュニケーションすることで解決できると思います。

現代は急速な産業化と情報化によって非人間化現象が起きています。このような時代こそコミュニケーションの機能と重要性についてももう一度考えるべきではないでしょうか。

受験生のディレンマと選択

鄭 智 賢(奨励賞)

韓国で受験生といったら、一応、高校三年生、大学に入学するため勉強している学生たちのことです。夜おそくまで熱心に勉強する。たまに休みはしても、遊びなんかしないで勉強する。こんなことが一般的な受験生のイメージです。どこまでもイメージということですから、実際こんなふうに受験勉強をしている人は多くないでしょう。

そういってもイメージというのは恐ろしいものです。こんなイメージに夢中になって、うちの子どもは受験生なのにぜんぜん勉強しない、と思ひこむ親たちもずいぶんと多いのです。

受験生の立場でいいわけをいってみましょう。受験生のまわりには勉強よりずっと楽しくみえることがたくさんあります。もし試験の勉強をしてみたことがあったら、こんな経験があるかもしれません。試験が近付いてくると興味がなかったメロドラマでさえみたくて、メロドラマどころか、ニュースや討論会さえもおもしろく感じられる。新しく発表された歌や雑誌や映画など、気に入るものばかり

りです。簡単にいって、試験に関わりないものすべてがおもしろいということです。

同じように、受験生を誘惑するものはたくさんあります。一年間、よそみもせずに、勉強に夢中になるということは、一般の学生にとって不可能に近いでしょう。一ヶ月ならまた違いますけど。しかし、一年は短い時間ではありません。一年、あるいは半年後に試験がある、これからがんばれ。そんなことばを聞いたって、本当に熱心になれる人は多くありません。

親たちがよくおっしゃることばがあります。今一年苦勞したら、後40年は樂だ。一年さえ経てば気のままになるから今は黙って勉強しろ。もちろん、客観的には妥当なことばです。40年以上を生きてきた親たちに、一年は長い時間ではないかもしれません。その短い時間を投資して会社で成功できる。いかにも魅力的なことではないでしょうか。

しかし、これはただ理論的なことです。受験生たちにとって、今でなければできないことがある、ということ。時間がたてばたつほどやりにくくなるものがやりたいのは、学生たちの共通の希望です。受験生だって例外ではありません。学生するとき、なにかをするということは、成人になってそのことをするのはまったく違う経験です。いくら受験生だとしても、その経験はあきらめたくないのです。これがたぶん多くの受験生たちのディレンマのはずです。

大学にいかなくても自分のしたいことができる、という少数の学生もあります。しかし大部分の学生たちはいろいろな理由で、大学をあきらめるわけにはいきません。そして大学に行くためには、勉強をしなければなりません。成績がよくて、そのうえ、特別な能力がある人だけがいい大学にいけます。この状況で大学に行こうとする学生は勉強をしなくてははいけません。一年間ですね。

一方、その一年間、学生たちは遊びたがっています。社会多方面で様々な経験を欲しがっています。はきいりいって、一年は、遊びながら勉強するにはたりない時間です。多くの人はこの問題を簡単にいっています。「一年勉強しろ。」気のままに。それでも大半の受験生は人のいうとおり、勉強を選びます。それはこの社会で生きのこるためのことです。これから何年は変わらないでしょう。受験生になったら仕方ないことです。

ですから、まだ受験生になってないうちに、ただひとつ、お考えになっていただきたいです。中途半端な受験生にならないことです。勉強、そして大学というのが自分の人生において本当に大切なものか、ぜひ考えてみてください。もし勉強の方が大切なら、勉強に一生懸命になってください。そして、そうではなかったら、自分の大切なものを探してみてください。そして、ほしい夢を実現する勇気をだしてください。

ITの発展と未来のコミュニケーション

朱 珍 河(銀賞)

最近の何年間、IT発展は今までのどの変化よりも激しく進行されています。ITの便利さのためにこの発展は革命と呼ばれても過ぎたことではないでしょうが、その代わりに多くの副作用を与えました。そのなかでもコミュニケーションに与えた影響はとて大きいです。

言葉という手段すら存在しなかったときから今まで言葉の登場、電話の発明などで人間のコミュニケーションは何度かの大きな変化がありましたけれど、そのたびに人々の心は乾いて行きました。身ぶりという原始的な手段しかなかったときは自分の意思を伝えることがとても難しかったです。しかし言葉ができてからは初めて相手をそしることができるようになりました。そして電話が発明されて相手が目の前にいなくても会話できるようになって言葉づかいに気をつけなくなったり、犯罪の手段として利用されたりしました。

しかし、このすべての変化よりもITの発展は人間の社会にあまりに大きな副作用を与えるかも知れません。相手の声さえも聞く必要なくコミュニケーションができるようになったため、時々他人との会話がまるで虚無なエコーのように思われるときさえあります。自分だけどんな人なのかが知られないのいうことを利用して他人をでたらめに批判したり、騙したりする人もいます。言葉づかいが丁寧だとしても、話の内容は相手を不愉快させる人もだんだん増えています。また、パソコンをよく使う10~20代の若い人たちとパソコンがうまく使えない少し年をとった人たちの間に葛藤の谷がより深くなることを加速化させています。それに、他人が自分と同じ人間だということが感じられないようになって、他人を信じられないようになる恐れもあります。こんな状況では正しいコミュニケーションは望めません。

多くの人たちが予想するように未来の社会はもっと個人的な社会になり、情けをかけることはなくなるはずですが。みなさんが今これについてどう思ってるのかは知りませんが、これはとても恐ろしいことです。親と子ども間の愛さえもなくなってしまうかも知れない未来の人間の社会は、どれだけ物質的な発展ができたとしてもそれに何の意味があるのでしょうか。人間は他人と付き合いながら生きて行くものです。

悪化され続けていくコミュニケーションの文化を治す方法を今までの私の経験を基にして考えてみると、基本的に丁寧で正しい言葉づかいが必要だと思います。そのうえに真実な心かけをもつことです。便利だけを求めて相手に対しての礼儀をわすれないように努力しなければなりません。少し悪口をいわれたってすぐ怒るより自分の行動について考え直すことも必要です。もっとも重要なのは相手もそれなりの考えをもっている、大切な人間だという事実を忘れないことです。

ここで話したことは基本的なこと、ITの発展にも揺れないコミュニケーションの文化をつくるために私たちがなすべきことはもっと多いはずですが。みなさんもインターネットを使うときに自分の行動をもう一度考えてみてください。そして明るくてあたたかい未来のコミュニケーションの文化をいっしょにつくっていきましょう！

日本人の「本音」文化とこれからの生き方

崔 まら(優秀賞)

数日前、その間、沈黙で一貫してきた北朝鮮が遺憾を表したことはみなさんもお存じの通りです。この表明に対し政府と与党はこれを北朝鮮の謝罪と受け入れました。しかし野党は謝罪としては受け

入れられないと反発しましたが、アメリカの 국무省のパウエル長官はそれを北朝鮮の謝罪声明と見做し、直ちに北朝鮮の外務相との会談を開催することにしました。このように、それぞれ違った反応をみて、私はひとつの疑問が生じました。このようなひとつの表現に対し、なぜ人々、または集団の間に違いがでてくるのでしょうか。それで私は北朝鮮の「本音」をひとつを考えてみることにしました。確かに、この「本音」を推してみるのは難しいことですが、これまでの北朝鮮のやり方に映してみると、この表現は単純な外交的慣用の遺憾の意味に値する「本音」だということを考えられます。

そういえば、私は日本語の勉強をしながら日本人は表では礼儀正しく、優しくすぐにでも自分自身の真心を相手にやってしまいそうな行動をしながら、決してその「本音」を表に現さないという日本人のいわゆる「本音」文化に対してしばしば聞いております。学校の先生をはじめ、幼い頃を日本で過ごした先生からも、また、小説や映画のなかでも、確かに日本人はこのような国民性をもっているということを感じさせられました。それでは私たち韓国の友だちは私に自分の本心をすべて話しながらつきあっているのでしょうか。実際、これまで付き合いしてきた友だちとの間を考えてみるとお互い相手の心の深いところを探るようなことばは避け、世間話に暇をつぶしながら過ごしました。他人にそんな「本音」に対して質問するのはお互いのプライバシーに対する侵害と考え、私自身もあえて「本音」を話したくなかったからです。

それで私のこれまでの短い経験のなかでみると私の韓国の友だちも「本音」をすべてむき出しながら付き合いしているとはいえません。私と「本音」をむき出しにし、まじめに付き合いしている友だちが何人もいるのでしょうか。それで私は考えてみました。こんなに「本音」がいないということは韓国人や日本人だけでなく、世界人の共通的な現象ではないか。人々はお互い本当に貴重だと認められる人ではないとある程度の心の壁、隔たりをおくのではないか!ということです。もちろん、私もそうだと認めるしかありません。

けれども私たちはこのような互いの壁を崩して行くことができます。世界化時代を迎え、国籍や人種の異なる人々と共にし、まして「近いながら遠い国」からワールド・カップ以降、今になっては「近いながら近い国」になった韓国と日本との間ではいうまでもありません。みなさんは「以心伝心」という言葉をご存じでしょうか。人と付き合うときには頭ではなく心で相手を応対することが大事だという意味です。心の窓の目で相手をみる、偽りのない自分の真心で相手を応対したとき、韓国人と日本人、いや、全世界どの国の人でも心がお互に通じると思います。これからの私はこの「以心伝心」という目標をむかってがんばりたいと思います。

自分の道へ

崔 主 賢(優秀賞)

みなさんは夢をもっていますか?それがどんな夢であれ、自分にはとても大切でしょう。しかし夢を叶えるためにどのくらい努力していますか?今日、私は自分の夢を叶えるためにコツコツと準備している友だちについて話そうと思っています。

去年の冬、私は日本のある大学で行われたスピーチ大会に参加したことがあります。そこでいろいろな国の学生たちに会いました。今からお話するのは、そのなかのある台湾人の友だちの話です。彼女の夢は日本のアニメの声優になることです。彼女は小学6年生の時、初めて日本のアニメに接しました。それから、今までの長い時間、アニメの声優になりたいという夢を持ち続けているそうです。その夢をもってから声優に関する資料とかを調べたり、アニメに関するイベントがある度に参加して同じ夢を持っている人に会ったりしているそうです。もちろん日本語の勉強にも頑張っています。

去る7月、台湾では今年の大学入試が終わりました。それで私はその友だちに、「どんな大学へ行くことにした?」と聞いてみました。すると、彼女は「行かない。」と答えました。意外な答えにびっくりした私は行かない理由を聞いていました。彼女は「大学へ行かなくてもかまわないなら私は私が考えている道へ行きたい。」と答えました。彼女は大学と自分の道へという岐路でためらいなく、自分の道を選んだのです。「そうですね、私だけの道へ。ちょっと他の人と違う道に行くのはある意味で寂しいけど、私の夢だから頑張っていきたい。」という彼女のことが私はわかるような気がしました。その友だちは今、日本の声優専門学校に入るためにアルバイトをしながらお金を貯めています。私は彼女がいつかきっといい声優になれると思います。

「夢のために生きる」これは彼女が私にしてくれたことばです。彼女は確かに自分の夢を信じてそれを叶えるために一所懸命に努力しています。みなさんはどうですか?夢のために生きていますか?私は今、大部分の人が夢さえもつこともなく、ただ無気力に生きています。夢のない人生ほど無意味なものはありません。

私たちは自分の夢について深く考えてみる時間が必要です。自分がやりたいことは何か、そしてそれに対して自分はどうかであるのか深く考えた後、本当に夢をみつけたら、一所懸命に努力していくことです。自分が努力して、汗をながして成し遂げた夢ほど人生において貴重なものはないと思います。そしてその夢を成し遂げる上で信念をもたなければなりません。彼女には自分の夢への確たる信念があったから迷わず自分だけの道を選ぶことができたのでしょう。それにその信念のおかげで「私はできる。」という勇気もてたのです。もしそれをもっていなかったら、他の人と同じような人生になって声優になりたいという夢は心のなかにだけ持ち続けていつかはその夢をあきらめるかもしれません。

今、私の話を聴いているみなさん、夢をもちましょう。そして自分の夢を信じましょう。そうしてから一所懸命に努力しましょう。そしたらいつかはきっと夢を叶えることができるし、年老いて今までの人生を振り返ったときに「貴重な夢を叶えることができてよかった。」といえるでしょう。みなさんもこんな人生を生きてみませんか。

私の日本人の友だち

洪 みれ(奨励賞)

私には5年間、付き合ってきた日本人の友だちが一人います。名前は「山田かなこ」です。顔を見

たことは一度しかありませんが、ずっとメールを交わしながら親しくなりました。私がかなこにはじめて会ったのは韓国でも日本でもなく、遠くカナダでした。

私はその当時、カナダにいる姑母の家を訪問中だったし、かなこも家族といっしょにカナダを旅行中でした。私は一週間、外国人の子どもたちとさまざまな探検活動をするデーキャンプというプログラムに参加することになって、そこでかなこをはじめて会いました。眼鏡をかけて髪の毛をあんでいるおとなしくてきれいな女の子でした。多くの子どもたちのなかで、私たち二人だけが東洋人でしたから、すぐ親しくなっている話をしました。もちろんその時、私は日本語ができませんでしたので英語で話しました。しかし、楽しかった一週間がすぎ、ついに別れの時間が近づいてきました。私はかなこに韓国の伝統を代表するハフェ仮面の首飾りを、彼女は私に着物を着ている小さな日本の人形をプレゼントし、住所を交換しました。私たちはお互いにきっと連絡しよう約束して惜しく別れました。

韓国に帰ってきた後、私はかなこの住所が書いてある紙を手にもってしばらくなやみました。私を手紙をだすことで彼女にとってはわずらわしいのではないかなあと心配しました。でも、結局勇気をだして手紙を書き、二週間ぐらい後、かなこから返事がきたときは本当にうれしかったです。その後、私たちはペンパルの友だちになりました。

初めるときは手紙で便りをよこしましたが、後にはメールを利用することになりました。学校で起こったくだらないことから友だちとか、将来の問題のような深刻な悩みまで打ちあけて、お互いに大きい力になりました。ひょっとしたらじきじきあわなくてメールだけで付きあってきたからそんなことが話せるほどの友だちになれたかもしれません。

私が外国語高校に入学して日本語を学んでからは、英語より日本語でメールを出すことが多くなり、かなこは喜んで私の日本語の先生になってくれました。かなこのおかげで私の日本語の実力もずいぶん伸びられました。

しかし、私がひとつ忘れていたことがありました。それは私は韓国人で、かなこは日本人であることでした。それで偶然、韓国と日本の両国の歴史について話したとき、お互いの立場ばかりかかかって二人の間がきまなくなったこともありました。過去の歴史のせいで現在の私たちまでこんなにそれに縛られなくてはならないことがとても悲しいことでした。長い間、メールをだしませんでした。結局、かなこのほうから先に謝ってきて、私も偏狭な態度を反省しました。そのおかげで韓国と日本の過去、現在、そして未来についていろいろ考えてみることもできました。

その後、かなここと私のあいだにはみえない壁ができたような気がしましたが、今はだんだんそれを壊していっています。このあいだのワールドカップのときはお互いの国を熱心に応援しながら、勝った度によろこんであげました。ワールド`カップのおかげで、韓国と日本がかなり仲がよくなったというニュースを聞いてなんとなく私たちのことのように、胸がいっぱいになりました。

韓国人と日本人、もしかしたら一番友だちになりにくい民族かもしれませんが、お互いに心を開いて話しあってみると案外親しくなりやすいと思います。かなここと私が異なる民族の絆から外れて、永遠な親友で残れるのを望みながら今日もかなこのメールを待っています。